ほほえむちから
glow
社会福祉法人グロー
滋賀県社会福祉事業団と
オープンスペースれがーとが
ひとつになりました

信楽学園ニュースレター
Newsletter from Shigaraki Gakuen

學園創立六十五周年記念號

特別記念

信樂學園新聞

Vol.6
WINTER 2018

The 65th Anniversary
SPECIAL ISSUE

CONTENTS

第一項
・園長コラム
・・・・信樂學園園長　山之内　洋
・フレッシュさん

第二項
・大日ヶ岳登山を振り返って
・・・・・・・・・・・・松川義朗
・職親会の昔と今
・・・・信樂町職親会　奥田 敏史
・信樂學園 65 周年記念 公開座談会
「池田太郎を語る」
社会福祉法人グロー理事長　北岡 賢剛
副理事長　牛谷 正人
相談担当理事　中島 秀夫
オープンスペースれがーと監理官　福山 良則

第三項
・學園エピソード
・汽車土瓶変遷・・・・逢坂 淳也

第四項
・各寮の今
・・・・・神山寮寮長　松川 義朗
・・・・・山手寮寮長　坂本ゆかり
・・・・・朝日寮寮長　穴迫 和代
・平成 28 年度 寄贈物品受領簿
・編集後記

園長コラム「変化してきた社会の中で、地域と一緒に新たな１ページを…」

今年度 滋賀県立信楽学園は65年目を迎えました。戦後まもなくに開設し、日本の経済成長の時代とともに学園も育ち、そして昭和から平成へ、20世紀から21世紀へと時代が移り変わり、社会の枠組みや環境も当時とは比べ物にならないくらいに変化してきました。しかし、昔ながらに変わらず学園を見守ってくれている神山地区の住民のみなさんの温かい目、力強い励ましがここにはあります。

今年度は久しぶりに学園に中学生が入園してきました。４月下旬に中２生が１名、８月下旬に中３生が２名入園しました。男児３名で、現在信楽中学校に通学しています。中学校の先生方の温かいご支援をいただきながら、３名とも楽しく学校生活を送っています。９月初旬に信楽中学校で第６９回目の体育祭が行われ、私も来賓として、そして彼らの保護者として体育祭を見に行ってきました。少子化に伴いクラス数も減ってきているにもかかわらず、とても熱気のある体育祭でした。

思えば、学園が創設されてから10年目の1962年（昭和37年）に信楽中学校神山学級が学園に開設されました。

当時学園で過ごしていた中学生たちは神山学級で勉学に勤しみ、社会で生きていく力を学園での生活で身につけていたと聞いています。それから半世紀以上が過ぎ、同じ学園の中学生が陸上競技、綱引き、信楽独自の盆踊り「やっちくれ」を題材にした創作ダンスを笑顔いっぱいで表現している姿を見ていると、胸の奥底から熱いものが込み上げてくるような感じがしました。その翌日には、学園の体育館で神山地区の敬老会が執り行われました。神山地区では現在75歳以上の高齢者が171名おられ、最高齢は102歳の女性でした。

開設時に園生たちと同じ年頃だった人たちが今80歳を越えていることを考えると、お集まりいただいた方々が学園を地域の中で支え、見守っていただいたことに本当に頭が下がる思いと、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

最近では災害に対する危機管理が重要とのことで、学園でも有事の際に児童の避難などを日々職員間で話し合っています。が、学園のことだけではなく、神山地区の避難時の要配慮者、要支援者に対してもできる限りのことをしながら、これまでの恩返しができればとも思っています。

65年を振り返りながら、これまで巣立って行った先輩児童たちのことを思い浮かべている中で、先日嬉しいニュースが飛び込んできました。平成23年度に就職した児童の会社から「新たに人を雇用したい。学園の児童を雇用したい。」と連絡がありました。その会社には２名の学園卒園者が働いており、とても活躍をしてくれています。その先輩たちの頑張りを見続けてきた会社が新たな人を雇うにあたって、学園の児童を雇用したいと声をかけてくれたのでした。

嬉しいことに学園にはこのような話が時々舞い込んできます。地道にコツコツと頑張って働いている先輩たちの姿が今の学園にいる児童たちの進路（地域移行）に役立っている場面が多くあります。そして今の児童たちの頑張っている姿が次の世代の児童たちに繋がっていることを信じています。

長い激動の時代を経て、社会環境の変化、子どもたちの生活様式の変化などいろんなことが変わってきている中で、子どもたちに対する向き合い方、子どもたちと一緒に考え、子どもたちが自分らしく生きていくためには今何が必要なのかなど、これまでの学園で培ってきた職員の支援力、技術力を継続しながら、また新たな１ページ目をめくる１年にしたいと感じています。　【園長　山之内　洋】

フレッシュさん

湖南市の「オープンスペースれがーと」より異動してきました。朝日寮と、地域移行支援（進路）を担当いたします。日々の業務を通じて、子どもたちや学園の目指すことを学んでいるところです。子どもたちの成長を支援しつつ、自分自身も様々なことを身につけていきたいと考えています。
どうぞよろしくお願いいたします。

渡邉　俊太郎

学園に来て約半年が過ぎ、生活や活動の時間を通して子どもたちとたくさんの感情を共有しています。どの場面でも子どもたちから教えてもらうことや気づかされることがあり、自分の力不足を感じるときも多くあります。そのなかで自分のできることを増やし子どもたちと一緒に成長できたらと思います。

平林　采

はじめまして。
９月より神山寮で勤務させて頂いています、今澤と言います。職員、園生に温かく迎えて頂きありがたく感じております。
今までの経験も活かしながら、また、ゼロからのスタートと気持ちを新たに日々成長していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

今澤　幹生

平成 29 年度　野外活動

大日ヶ岳登山を振り返って

ここ近年台風や大雨に悩まされ続けてきた当学園の登山活動。今年は同行職員に晴れ女、晴れ男を選抜して万全の体制で当日を迎えました。それまでの登山練習も、例年にまして天気には恵まれ、順調に消化することができていました。それだけに、それだけに、台風5号の迷走ぶりには肝を冷やかされました。7月21日、日本よりはるか遠方の北マリアナ海域で生を受けた台風が、迷走を繰り返し日本列島へ向けて進路を切ったのが8月5日。台風一過の晴天を期待するのも束の間。その後の歩みは国会の牛歩戦術よろしくノロノロ運行。列島の長寿社会を反映してか、気が付けば史上3位の記録的長寿台風となった訳であります。その名も「ノルー」。

8日当日は出発時間を遅らせて何とか活動を実施する方向で信楽を出発。予定していた焼肉昼食はキャンセルとなりましたが、道中台風5号を追いかける形で、目的地の岐阜県ひるがの高原に向けバスを走らせました。幸い現地の風雨は大したこともなかったようで、翌日の天気も回復が期待できる状況でした。夕食はパーティーごとに協力してカレーライス作りです。練習の成果が出て、皆スムーズに動くことができ、自分の役割を果たしていました。宿泊施設はバンガローを使用。最近流行のグランピングではないですが、テント泊に比べればやはり快適で手間が楽でした。

翌日9日は大日ヶ岳登山に向けて早朝キャンプ場を出発。天候も回復し、全員同じ山頂を目指して、よ～いドン！台風5号を見習ったのか、牛歩で歩を進めるパーティーあり。目標を見失い、あとどれだけ登ればいいのか頻繁に連絡してくるパーティーあり。静寂な登山道に賑やかな話声や悲鳴がこだましています。さすがにAパーティーは、余裕で山頂を制覇して、集合場所のバス駐車場に戻って来ています。お見事としか言いようがありません。

半日の登山でしたが、それぞれ各パーティーに課せられた目標を達成して、充実感を持って、無事下山することができています。今回は危ぶまれる天候の中、活動を実施したということもあり、希望される保護者の方に限定した取り組みとなりましたが、定期的に活動の動向をメールにて報告させていただきました。野外活動には天気の動向が左右するということは、避けては通れない宿命ではありますが、ノルーには本当に困ったものです。ノルーとは〝のろ鹿“のことを意味するらしく、正にのろい鹿。まあ、鹿ならしかたないですね。次年度こそは、台風に悩まされない年になりますようにお祈りしております。

【実行委員長　松川義朗】

滋賀県立信楽学園の 65 周年、おめでとうございます。
信楽学園と信楽職親会の繋がりは、障がいのある人たちが地域の人と共に働き、地域にとけこみ自立できるようにソフト・ハード両面でサポートして参りました。

当初は、なかなか障がい者雇用に理解が得られ無かったと聞いております。昭和 28 年の大水害に災害復旧活動を通じて地域の人達に障がいのある人の理解が深まり、障がい者雇用が地域に根付いて行きました。

信楽焼産業は、「まじめで、根気強い」障がい者の人たちに合った仕事です。1997 年職親会は、事業所数 45、障がい者雇用数 145 名まで拡大しました。当時、弊社では 18 名の障がい者雇用をしており、焼成台車上段から約 20kg の植木鉢を軽々と降す人、肩もみの上手な人、商品を数えるのが得意な人、掃除が上手な人、叱られたらズボンを脱いで事務所に逃げる人など、様々な特技や個性を持つ人たちが、違和感もなく職場に溶け込んで、自然体の中にて活気ある職場でした。これこそがノーマライゼーションかと思ったりしました。

職親会（しょくおやかい）の昔と今

現在は、5 名の雇用となりましたが、自分たちの持ち場で何をすべきか考えながら黙々と仕事をしております。

職親会も、地場産業の低迷で 2016 年の会員事業所数 22・雇用数 24 名まで減少しました。この様な環境下でも職親会のやるべき事を確認し、一歩一歩確実に前進を心掛け、地場産業の発展に貢献し、障がいのある人たちが安全で安心して働ける職場環境作りを進め、雇用拡大を図りたいと思います。

これからも、信楽学園と信楽町職親会が今以上に連携をとり、地域に根ざした活動に取り組み、双方が発展できるよう願っております。

【信楽町職親会 会長　奥田 敏史】

信楽学園 65 周年 公開座談会

池田太郎を語る

平成２９年６月２８日、滋賀県立むれやま荘の会議室にて、当学園の指定管理者である社会福祉法人グロー (GLOW) の北岡賢剛理事長・中島秀夫相談担当理事、福山良則監理官とそして進行役の牛谷正人副理事長の４氏にご登壇いただき、当学園の創設者である故池田太郎氏のお人柄を中心に、当時のいろいろなエピソードや池田氏に影響を受けたことなどをざっくばらんに語っていただきました。ふだん、私たちが聞き知ることができないようなお話や、笑いあり、感動ありの座談会となり、６５周年にふさわしい貴重な「池田太郎を語る」会となりました。

今号では、紙面の都合上、池田太郎氏の先駆的な取り組み「地域で働く、地域で暮らす」「今に生きる実践」を掲載させていただきます。

65th Anniversary

中島　これまで振り返って思うと、池田太郎さんっていうのは、本当に先駆的な取り組みとして「地域で働く、地域で暮らす」ことをしてこられた方ですよね。今もそのことをみんなが求めてやっているわけなんですよね。あの民間下宿しかり、あるいは地域就労しかり、さまざまな取り組みしかりなんですけれども、今であっても、全然、色あせない取り組みだと思うんですよね。

当時、本当に周りの施設からは、「信楽って何やってんや」「二重取り」とかいろいろ言われましたしね。批判の的でした。二重取りというのは、措置費を丸ごともらって、障がいのある人を、地域の工場に働きに行ってもらって、賃金をもらっていることで、二重取りと言う風に言われました。しかし、それは本当に尊いことであり、その賃金でグループホーム等へ出て行かれる方もたくさんありましたし、生活体験として町に買い物に行かれる方もありました。今でも全然その取り組みは色あせていない。

そして自分自身、「今の時代に自分が何をしたいか、地域に何ができるのだろうかということ」を、池田太郎さんの実践から学び、振り返りながら取り組んできたのかなあと思わしていただく。だから、原点と言うと原点なんです。

福山　僕は太郎さんの残した『4 つの願い』のひとつ「無用の存在でなく有用の存在であると思われたい」、これは今も続けているし、グローの理念である「生きることが光になる」と同じようなことかなといつも照らし合わせてるんです。

もうひとつは、「渦の教育」です。太郎さんは、「大きなうねりの中で、やっぱり、あっち向いている人もだんだん渦の中で、気づいたら真ん中にいるよ。そういうねりが大事や。うねりを作るのは誰か」というようなことをよく話されていた。その後、北岡さんと「そのことを自分たちでも考えようね」みたいな話をした記憶がありますね。そういうことが、今、これからあえて大事かなとも思ってます。量的に、いろんなことを細かく決めていくことも大事やけど、大きなうねりの中で、福祉の流れの中で、自分をどう位置付けていくのかっていうことを考える力を持っていくということが大事かなと思います。

牛谷　私が信楽を訪ねた昭和５０年代の頃のグループホームは町内の工場で働ける人たちが施設から出て暮らす場所という感じだったんですけれども、ホームを訪ねてみると結構重い人がホームから青年寮の授産所に通う例もあったり。ホームのキーパーとして家族で一緒に暮らしていた福山さん、信楽のホームって、比較的重い人も利用されていた印象がありますがそのへんについてお願いします。

福山　当時のことを思い起こすと、１７年間一緒に、同居型のグループホームというのをやりました。障がいのある人が４人と僕の家族。障害支援区分みたいなことに当てはめると、２ぐらいになるのかな。　当時信楽の中では、ほぼ同居型で↗

地域の方や
学園 OB に聞いた

学園エピソード

エピソード 1

信楽学園と信楽青年寮は、 現在の信楽学園が建っている場所に併設されていた。 今の学園体育館を建てる前に青年寮の2棟が建てられていた。

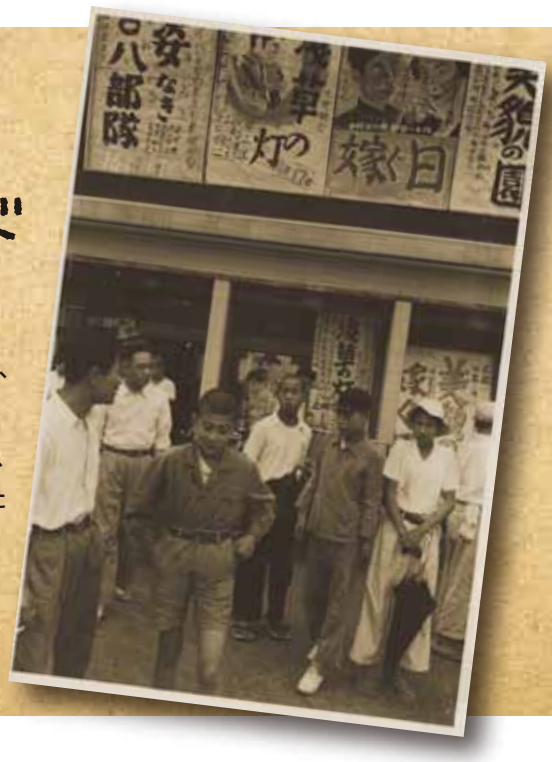
この青年寮が建つ前は全国から移ってこられて来た人の部屋がなく、 職員の自宅で空いている部屋に学園では課題の少ない子どもたちを住まわせた。 その部屋を提供してくれた職員は学園で他の子どもらと一緒に暮らしていた。

これが民間下宿のスタートとなり、 後に生活ホーム （県単事業）、 グループホームのモデルとなった。

エピソード 2

池田太郎さんは「ケチ」と言われていて、県庁の辞令式に着ていく背広がない状況であった。 講師代を頂いても、自分のボーナスを頂いても、職員の手当にしていて自分の懐に入れることはなかった。

このような状況を見かねた国の職員が園長公舎を建ててくれた。



エピソード 3

池田太郎さんは子どもたちから「アマガエル」と呼ばれていた。理由はいつも学園を見て回っていたためで、特に雨の日は山手から雨水が流れてくるので、特に見守りをしていたようです。

エピソード 4

演劇は当時から盛んに行われていた。信楽警察署の前に映画館兼芝居小屋があり、そこで公演していた。 演劇の取り組みには専門家が手伝いに来てくれていた。当時は娯楽が少なく児童も職員も楽しみにしていた。

汽車土瓶変遷

汽車土瓶の歴史は明治 20 年代にはすで作られていたと記録に残っています。作成窯場は東から益子、信楽、白石が挙げられますが、常滑や瀬戸も見られることから大きな窯場は汽車土瓶作成を行っていたようです。

信楽での汽車土瓶作成は信楽町神山の村瀬音次郎さんが作成されたところが始まりだと言われております。当時の土瓶形状は流行していた山水土瓶を一回り小さくしたものであったようです。

また明治 30 年代には駅名入り汽車土瓶が作られるようになり需要の増加が見られます。時代は大正時代に入り、大正 10 年頃には陶製汽車土瓶が不衛生で中身が見えないことから使用禁止になりました。そこで登場したのがガラス製容器です。しかし尿瓶のように見えて使用する気にならなかったり、車窓から捨てられ沿線の農民や線路工夫が怪我をするなどの理由から評判は良くありませんでした。そうしたことから昭和に入ると陶製土瓶が復活していきました。この頃から手回ロクロに加え石膏型機械ロクロも導入され他の窯場では泥しょう鋳込みによる土瓶作成も登場しました。戦後、横書きが左から右に変更になり文字入り汽車土瓶は少なくなりました。

さて信楽学園が昭和 27 年に発足し当初は石膏型機械ロクロによる成型でしたが泥しょう鋳込に移行していきます。

信楽学園では年間 2 万個～ 3 万個作成していたと言われています。そして昭和 30 年代当初にポリエチレン容器が登場します。当初は臭いが気になると言ったことで評判は良くなかったのですが、軽量、可燃処理が可能、原価が安価であることで一気に広がっていきます。そしてポリエチレン容器が登場してから 10 年ほどで陶製の汽車土瓶は終焉を迎えます。

そして平成２０年代になり信楽学園で汽車土瓶が復活されました。当時の物より少し大きくなり、色も４色です。懐かしさもあって当時の事を思い出される方もおられます。日本の高度成長とともに下火になった汽車土瓶。温故知新となってくれることを期待するばかりです。 【逢坂淳也】

（※参考文献　信楽汽車土瓶　畑中英二編）

↘通勤型っていうのはほとんどなかったです。施設の敷地の中にグループホームがありましたが、町内に存在するホームの多くは同居型で、暮らしや仕事まで、ひとまとめで、キーパーさんにお願いという感じでした。重いとか軽いとかという視点でなく、町の中で暮らすことの大切さを…みたいな取り組みだったと…。

牛谷 昭和５８年に卒論を書くのに信楽に行かせてもらった時に、ホームの実践にものすごく衝撃を受けた記憶があります。当時まだ生きていらっしゃった池田先生が話されたことで、「この子らの発達は施設の中だけでは絶対なしえないんだ」いう話を何度も聞かされた覚えがあります。「とにかく、町の中で暮らして町の人と関わることにこだわっていくことで、この人たちは人格的に成長をしていくんだよ。」と。また、当時よく言われていたのは、「そのためには、その人たちの存在を見せ倒すことや」と。「とにかく人って言うのは、知らない人に対しては当たり前に警戒するやろ、毎日毎日顔合わせてれば、たとえ変な行動をしていても警戒心は無くなっていく。そうゆう意味で施設の職員が施設の中でだけで仕事をしていたらあかん。この人らと一緒に町の中に出て行くことが大事や。出来ればこの人たちだけが町の中に出て行って、トラブルがあったらそのしりぬぐいをするのが職員の仕事じゃないか。」と。池田先生という人は施設のあり方を施設の中だけで語らなかった、常に地域との関わりで語られていた人という印象がすごく残っています。

北岡 「地域に慣れる、地域が慣れる。」ということ、「障害のある人たち自身が、地域に出かけて行く事に慣れることで、地域の人たちが障害のある人たちに慣れるのだ」と言う話を、牛谷さんが言いたいのだと思うのですけど、「知的障害があるということは、どういうことか、を考える時に、そのことに対して、普通に考えたら良い。」ということを、太郎さんは僕たちに教えてくれたのだと思う。「僕らが役に立たない存在だと言われたら嫌だから、彼らも私たちと同じように、誰かの役に立ちたいと思っているのだと、そういうふうに普通に考えたら良い」と。そういうことを、ずっと取り組まれた人じゃないかと思っています。「障害のある人たちに対して、どうゆう仕事を私たちはしなければいけないのか」ということを太郎さんの視点で色々と教えていただきました。僕はよく思うのだけど、池田太郎さんって障害のある人たちを大事にして、どうやってこの人たちが人間として魅力を発揮するかと考えつつも、そのことと同じくらい職員のそれぞれの個性を伸ばしながら、職員たちの人生が豊かになるかということを考えていた人だと思う。職員を育てるということも合わせて考えて頂いた様な感じがしました。

僕は、理事長という仕事をやっているのだけれども、時々太郎さんのことを思い出します。「僕は、太郎さんの様に職員の皆さんを大切に思っているだろうか」と。「職員の方にどう伸びて行ってもらおう」とか。職員の皆さんは自分の人生を充実したものにしようと思って、この法人で仕事をされているのだと思っています。その職員たちに対して我々のような立場にいる者たちが、それぞれの職員のことを、チームとして、法人全体として考えることが必要だと考えています。太郎さんには、僕のことを考えてくれて本当にありがとうと言いたいです。

最後に太郎さんのお葬式の様子をお話しして終わります。真冬の12月14日で、すごく寒い日でした。病院から太郎さんが運ばれて来た。翌日、お通夜が始まって、「太郎さんも自分の葬式は賑やかにやってくれと言ってたよね」と、沢山、皆で酒を飲みながら天国に見送りました。最後に太郎さんから教わったことは、『もう太郎さんがいない』ということでした。太郎さんがいないから自分で考えていくしかないと思った時に、このことを太郎さんの死から学びました。

神山寮の今

歴史ある「神山寮」で現在生活する児童は16名です。一様に言えることは、“経験不足からくる未熟さ”ということでしょうか。また、ゲームや携帯電話には詳しいが、反面対人的な係わり方や表現の方法が分からないというアンバランスな一面を抱えています。そんな思春期を迎える児童が、お互いに刺激し合いながら成長しています。近い境遇を持つ児童だからこそ分かり合えるものがある。「子は子の中で成長する」ことを日々目の当たりにしながら、職員も成長しています。

今年は、３名の中学生が寮で生活しながら、近郊の信楽中学校へ通っています。学園と信楽中学校との関係は古く、昭和 37 年に信楽中学校に特別学級が一学級設置されることになり、信楽学園に置かれています。いつの時代も、学園内に響き渡る「行ってきます。帰りました。」という元気な児童の声が、新鮮な空気をいっしょに運んできてくれます。

【神山寮寮長　松川義朗】

山手寮の今

山手寮（女子寮）の朝・・・「おはようございます」と眠そうな表情でひとりの女子児童が起きてくる。「今日は、みそ汁を作る当番ね」と職員が声をかける。児童は眠い眼をこすりながら、上級生から教えてもらったみそ汁の作り方で作り始める。寮では、上級生から教えてもらいながら身に付けていくことがたくさんある。調理・清掃・生活のルールなど、１日の流れの中で、自分で生活していく力=「生きていく力」を学んでいく。

最近の寮内では、コミュニケーションがうまくとれず、子どもたちどうしでの行き違いも日常茶飯事ではあるが、その中で、「自分らしく生きること」を悩みながらも職員と考え過ごしている。日々、喜びや悲しみも感じとりながら自分らしく幸せに生きる道筋を、子どもたち同士や家族・地域の人々・関係機関や職員など一緒になって取り組む過程は、昔も今も変わらない。

早朝に、山手寮から眺める信楽の風景は、心が和む静かな一日のスタートである。現在の山手寮の活気ある子どもたちは、６名。今日もまた、元気な子どもたちの声が、信楽に響く。

【山手寮寮長　坂本ゆかり】

朝日寮の今

朝日寮は、定員 14 名、居室が 7 部屋の自活訓練の場です。設置目的どおり、寮の清掃、洗濯や、朝夕の配膳（主菜、副菜は厨房から運びます）に加え、朝夕のご飯炊きも自分たちで行います。今年度当初は 3 年目児童のみ 8 名が利用されていましたが、全員が寮での役割を果たしながら町内外の実習に出ています。

更に、町内実習を継続しながら単位制高校に通う児童、介護の資格取得を目指し講座に通う児童と進路に向けての動きも此までに無く多様になっています。全員が最終年であることから、就労に向けてのガイダンスも加わり、多忙な日々を送っている朝日寮生です。

7 月の修学旅行が終わり、就職活動も本格的に開始となりました。がんばれ！朝日寮生。

【朝日寮寮長　穴迫 和代】

寄贈物品受領簿

平成 28 年度の物品受領明細です
皆様のあたたかいご厚意に感謝いたします

受領年月日	物品名	数量	寄贈者（敬称略）
H28.05.30	お菓子	２箱	KEIZ アピタ伊賀上野店
H28.06.27	紅白もち 植物油	大各１個 ５本	真徳寺
H28.09.17	うるち米（玄米） もち米（玄米）	30kg×２袋 30kg×１袋	江友会
H28.09.27	うるち米（玄米）	30kg×１袋	加藤製陶
H28.09.09	お菓子	３箱	KEIZ アピタ伊賀上野店
H28.12.01	寄付金 タオル	10万円 100枚	信楽町仏教連合婦人会
H28.12.07	寄付金	47.048円	TOTO UNION滋賀支部
H28.12.13	野菜	キャベツ90コ・白菜10コ 大根100本・人参100本	タキイ研究農場
H28.12.16 H28.12.21	もち米 もちつき開催	10kg	江田・神山区民生委員 児童委協議会
H28.12.21	クリスマスケーキ	ケーキ32個	国際ソロプチミスト甲賀
H28.12.19	みかん	１箱	加藤製陶
H28.12.22	シュークリーム	31個	信楽町職親会
H28.12.27	ポテトチップ	８箱（24袋入り）	㈱カルビー・イートーク
H29.01.10	鏡餅・子餅 サラダ油	大各1個・多数 ３本	真徳寺
H29.01.24	お菓子	３箱	KEIZ アピタ伊賀上野店
H29.02.18	御祝	５千円	信楽町職親会
H29.02.19	御祝	５千円	北村信雄
H29.03.25	登山靴 マット	６足 28個	信楽学園保護者会

編集後記

今回、この記念号を作る際に目にしたたくさんの資料や写真を見せて頂きました。昭和 27 年に開設した当時、読書が趣味だった池田太郎さんでしたが、読んでいる間もないほど日々に追われていたそうです。 現園長は読書が趣味ではありませんが、日々に追われている姿は一緒だな。と思いました。

移りゆく時代とともに成長してきた学園を今後ともご支援やご協力お願い致します。

信楽学園ニューズレター制作スタッフ一同

信楽学園 ニューズレター Vol.6
Newsletter from Shigaraki Gakuen
編集・発行 ■ 社会福祉法人 グロー
glow ～生きることが光になる～ www.glow.or.jp
滋賀県立 信楽学園

〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町神山４７０
☎0748-82-0051 / email : shigarakigakuen@glow.or.jp

デザイン ■ 上垣 智史／mdf design